

## 夏季福音特別集會 第2回集會

## 確かな希望——ローマ書5章1～5節

2003年8月16日（御殿場YMCA東山荘）

神は人を通して御業をなさる この世に絶対大丈夫なものはない キリストというリアリティー  
祈る相手をもつ 牢屋の中に居ても自由 キリストに在る自由 自由の御霊 愛への自由 神の  
栄光にあずかる希望 苦難は希望を生みだす 神の愛が心の中であふれ出る 安らかに行きなさい  
い 100%にすべてぶつけていく 天国への旅路 確かな希望

## ●神は人を通して御業をなさる

今、コルネリオというお話がありましたように、神さまは人を偏り見られぬ。どのような職業であろうと、本心に誠を求め、生命賭けの方々に対してはそれだけ、水を割らずにキリストは迫ってください。私は、今、こういう国際情勢の中ですから、非常に大事な役割を担っておられると思っっている。いろんな誤解を受けながら、あの方々はそれを耐えてこられた方々だと正直思っっている。

私は、それぞれの役割を与えられた方々が、それをキリストの前に、神の前に——己ではなくて——何かに仕える、尽くす、生命を献げるといふ、そういう気持ちで携わられたら、素晴らしいと思っっている。それが別の方向に方向転換されてしまいますと、あの戦前のようなああいう悲劇が待ち受けます。もはや他の人たちで押さえることができなくなつて暴発しました。けれども、下々で本心に一生懸命に働いてる方々には何の罪もないんです。一部の上層部が独走いたしますと、誤つた方向に国全体を巻き込んでしまう。誰も押さえられないという、そういう現象が起りました。私は、ナチス・ドイツでも同じことではなかったかと思ふ。それはまことに人間の中に潜んでる何ものかにサタンがつけこんで、人間を蹂躪してしまふ、そういう悲劇的な現実だと思ふんです。

私はそういうことで、何の偏見も持ちません。むしろ、「ご苦労さま」という気持ちでおりました。それで、本当はそういうことも申したかったんですが、そんなことも出てこないままに、キリストのことばかり、始めから終りまで、キリストのことばかりでした。それで良かったのだと思っっています。そのお話を聞いてくださった方々が何かを感じ取つて、自分の行く道の支えにしてくださいと、ずつとそれから願つております。けれども、私は人の前ではあまりそういうことは申しません。誤解を招くからということ、申ししておりませんけれども。

私たちは自分の大きさ小ささではない。キリストが用いてなしてください。そうすると、ある時はザアカイの家に泊まられたイエスさまのようになり、ある時はマルタ・マリヤの家に泊まられたイエスさまのようになり、行くところ行くところにキリストと一緒にいて



くださるのですから、そのお方が御思いをなしてください。

やはり、神さまというのは人を通さない<sup>みわざ</sup>と御業をなさらないですね。これは不思議なものです。人を通して御業をなさる。預言者が遣わされました。最後に、切り札のイエス・キリストが遣わされました。神さまはいつも天界に在<sup>いま</sup>して熱い祈りを持っておられるんですけれども、それを具体化して本当に地上に下りてきて、そして、言葉でもって、手で触り、身体を支え担うという、具体的なそういうケアをし——心のケア、身体<sup>からだ</sup>のケア——そうしたものをことごとく具体的にしてくれる人を神さまは求めておられると思う。それが一番大きかったのはキリストさまですよ。これは本当にでかいお方。我々はその分身です。キリストというお方がそれぞれの方の中に宿って、

「あなた方は私よりも大きなわざをなす」

と言って、弟子を遣わされたわけです。それは弟子が立派だからではない。弟子がキリストに委ねきつたときに、キリストは凄い御業をなさったんです。だから、

「我を視よ」

と言ったペテロが、

「なぜ、我を見るか。私の中にはイエス・キリストの御名<sup>みな</sup>以外には何も無い。

御名によりて歩め」

と言って手を握つたら、力が働いて、生まれながらの跛者が立つてしまった。ペテロが立たせたのではない。キリストがペテロを通して立たされたんです。使徒行伝のペテロを見てください、福音書でイエスがなさったことの、そっくりさんみたいなことをしばしばやっているんですよ。やつぱり、ペテロはイエスさまにくっついていましたからね。絶えず愛されながら、叱られながら、躓<sup>つまず</sup>きながら。しかし、そのペテロが今度は、エルサレム教団のリーダーとして素晴らしく活躍しています。その姿は本当にキリストを思わせるような姿です。ペテロとヨハネというコンビです。それから、異邦人伝道の方はパウロ。そういう方々を通して、福音は伝えられていって今日に至っているんです。

●この世に絶対大丈夫なものはない

あの使徒行伝を、皆さん、愛読してくださいね。あそこで書かれている現実は今も働いているんです。あれはあれで完結編ではない。続編を私たちはやらされている。キリストは私たちを通して働きたいんです。この世界が深刻化すればするほど逆比例して、キリストは伸び、働き、救い上げようとしていらつしやる。ですから、私たちは、国籍がどうだ、血筋がどうだ、生れがどうだと、そんなことはキリストにおいてはもう問題ではありません。そんなことが問題となるような世界にキリストはおられない。そういうものを問題にしない絶対界、その質をもつて我々に迫ってきてくださっている。

我々は目に見えているところは、この現実の世界です。そこではさまざまな差別もあり、



痛みがあちらこちらに現実にあります。それらをそのままにした上で、それを一番どん底から背負ってくださっている。十字架は贖いであると同時に担いなんです、背負いなんです。本当に背負ってくださっている。そのことをしっかりと受けとってあげれば、必ず道は開けていく。

キリストにおいては不可能ということはないんですね。ただし、その「不可能わない」ということを、目の前で即座に何かが起こるといふふうに思っていたら困ります。神さまの世界では全部、できあがっているんです。それが見える形で表れてくるのには時間がかかることがあります。むしろ、時間がかかると言った方がいいでしょうね。けれども、神さまの世界では、我々が本気で祈ったなら、

「然り、受けとったよ。大丈夫だよ」

と、それが来ているんです。その「大丈夫だよ」という、それを我々が心にいただいて、イエスさまが「大丈夫だ」と言われたら、これほど確かなことはない。イエスさまが

「大丈夫だよ、安心しなさい」

と言われたら、これに勝る大丈夫はないんです。

逆に聞きたい。他に何かがあるの、大丈夫なものって？ この世の中で、大丈夫なもの、

「絶対にまちがいおへん」

という、絶対大丈夫、間違いありませんというもの、それはこの世の中には何もありません。それを最近のいろんな出来事、ここ数年起こっております出来事は示しています。科学の粋を極めて、スペースシャトルを打ち上げた。けれども、途中で空中分解した。これは絶対大丈夫というものがゆらぐ。我々はもちろん大自然の前にも無力ですし、その他さまざまなことにおいて、どんなに人智を結集して、これは絶対大丈夫ということをやったって、そういうことで計画された原子力発電所だって壊れることはある。ですから、人間の世界では絶対大丈夫ということはむしろあり得ないと思っただ方がいいんじゃないでしょうか。もし、それが大丈夫という形で運行されているとしたら、それはまことに神さまの守りのお陰なのであって、人間の誇るべきことではない。人間は人智を結集して集めましたも、どこかで一つミスがあると、それが命とりになる。人間である以上、ミスがないということとは起こり得ないんです。コンピュータは完璧だといったって、現実にはそうじゃない。

昨日だって、カナダ、ニューヨーク、あのあたりの北アメリカの方で大規模な停電事故があつて、目茶苦茶になつている。もうそれ以上、例をあげる必要はありません。この地上世界で、これは絶対大丈夫だというのは一つもない。これは私には救いだと思つていきます。もしも、そんな大丈夫が簡単にできあがつたら、神さまを信じなくても、その大丈夫の方へ行きましようということになりますね。それがそうはいかない。気象だつてそうです。パリで40度だと言っているかと思うと、東京では20度だと言っているし。まことに温暖化現象やエルニーニョ現象や、いろんなことで、それこそ人智を結集してもなお、そ



れをあざわらうかのごとくに自然が壊されていつている。結局、壊したのも人間なんです。科学が発達してないときには、自然は穏やかだったんだろうと思います。それが科学が発達して、それで自然の秩序を壊していった。それがこういう形でいろんなところで現れてきているわけです。

### ●キリストというリアリティー

ですから、パウロはローマ書8章の中で祈ってますよ。

「すべての被造物は今に至るまで贖われんことを望みて共に呻き苦しんでいる」

と。我々人間だけではない。大自然、生き物も植物も大地も、すべてが呻いている。

「神の子の出現を待ち望んでいる」

と。私たち一人ひとりが——

「御霊の初めの実を持つ我ら」

とパウロが言っている——我らが先ず身体が贖われ、全き姿になって現れてくる。それが全世界に広がりますと、その時、大自然も救われる。イザヤ書にも出てきている。

「狼が小羊と共に宿る。乳飲み子たちが毒蛇の洞で蛇たちと仲良く暮らす。ラ

イオンもトラもみんな童たちと共に植物を食んで、もはや弱肉強食はない」

と。そういう世界が実現するということをイザヤ書11章は歌っている。

「それは全地に主の御言が満ち渡るからである」

と書いてあります。全地に主の御言、御霊が満ち溢れますと、その時に本当に自然は回復される。私の思いでは、おそらくそれは新天地の到来の時ではないんだろうと、黙示録的な現実というものは避けがたいんだろうと思います。だから、

「万物の終り近づけり。何よりも祈りをあつくせよ」

とペテロは言ってくれました。二千年前の問題ではないんです。神さまにあっては千年は一日のごとく、一日は千年のごとくという。いわゆる我々の時間の感覚というものは通用しない。我々の記憶というものは、これは恵みですけれども、どんな悲しいことも時間がいやしてくれる。これは恵みですよ。であると同時に、神さまにおいては、その時間というものは、人間の計る時間というものは問題にならない。いつも現在として、「現在」「今」という形で神さまの御言、生命は切り込んできている。直結しているんです。永遠界と我々は直結している。そういうリアリティーの中に私たちは置かれている。

この特別集会ではぜひ、そういうリアリティーを——これが本ものなんだという——我々は生活の中で1%しかそれを味わわないかもしれない。日数的に、量的には。けれども、その1%が残りの99%を圧倒している。一という、パン種一粒、あるいは芥種一粒。

「パン種が全体を膨らみます」



「芥種一粒の信仰があつたら、山が動く」

と、キリストが言われたように、その御霊の「一つ」というのは凄いです。

そういう中に私たちが常時、どっぷり浸かつて生きるようにと。そうしますと、量的にはこの世的な現実が圧倒的であつても、質的にその一を持っていきますと、この量的な圧倒的なこの世の矛盾だらけのどうしようもない救いがたき現実が、私たちを苦しめなくなつてしまふ。これは過ぎ行くものだ、これは最後のものではない。永遠なるものがいよいよ光り輝き、力を發揮し、私たちを捕らえて離さない。これが常に、今日も明日も次の日も、すべての瞬間、瞬間は神さまの御手の中にあるということ。

「汝の時は神の御手の中にあり。わが時はすべて主の中にあり」

という。そういう現実が我々の生活の中にしみ込んでまいりますと、我々は現実に支配されなくなつてくる。

「地上は嵐ですよ」

「ああ、そうですね。それは嵐もありますよね」

と。非常に冷たい言い方ですけども。

「土砂崩れが起きて、犠牲になりました」

「それはそういうこともあるでしょうね。新天地が来るまでは仕方がありません」

「あなたは冷たい人ですね」

「いくら感情的に同情したつて、私はどうにもできません。私はそれら一切の出来事を主さまに委ねています。主さまがご判断なさることです」

と。そういう意味では、私は冷たい人間です。というのには、この地上はそのくらい不確かだということ。そのことに目覚めて、本当のものに早くすがつてほしいという、その思いが強いです。これが、何もなくて本当に無事、幸いで、ご飯は満ち足りており、あらゆる病は克服され、治安は全く回復され、といういわゆる地上的天国がもし、神さまぬきで成就したら、誰も神さまを求めない。それは不幸ですよ。ハッキリ言ひまして、不幸です。永遠の生命、神さまと直結し、キリストと直結し、その生命をいただいでこそ、私たちは生きているという実感が持てる。持ったから言えるんです。それを持つまでは、それは単なるイリュージョン、幻想、あこがれ、夢にしかすぎなかつたんです。願望にしかすぎなかつた。それが、キリストにでつくわして、キリストというリアティーを知つてしまつたら、それは願望ではなくて、確かなる希望なんです。今日の題ですけれども、「確かなる希望」なんです。はかなき希望でもなければ、はかなき願望でもない。確かなる希望です。希望は必ず実現していく。

新約聖書をご覧下さい。

「忍耐して待つ・望みの忍耐」

とか、「忍耐」と「希望」がいつもワンセットで出てきている。それを注意深く読んでくだ



さいね、パウロの手紙なんかを。希望というのは、今直ちには実現しない。けれども、実現することは確実である。だったら、忍耐強く、雄々しく勇ましく、それに向かつて進むのではないかと。希望は絶対に失望に終わらない。

### ●祈る相手をもつ

今日、ローマ書で読んでいただきました力強い朗読の中に、「希望」という言葉が三回出てました。

我々はキリストに出会うまでは、希望なき人生だった。希望なき人生、その中でどうして生きればいいのか。これは苦しいですよ。楽天家の方が、私はうらやましくしてしようがなかった。こんな不確かな、何ひとつ確かなものがないところで、どうして、あの人はへへらへへら笑っていられるのだろうか。どうして、ケセラセラでやれるんだろうかと。私も学生時代から不思議でしょうがなかった。

自分は自分に全責任をもつ。自分が責任ある家族に責任を果たす。そういうことを真剣に考えている時に、自分を見つめたら、何も保証がない。大学を出て、将来、実社会へ入っていく。実社会は恐ろしいところだと思っていました。あらゆる策略があり、騙し騙され、悪知恵のあるやつが成功し、

「お前のような青二才は、赤子のごときもので、ひとひねりもなく潰れてしまうよ」

と、そういう、私は社会というものに対する恐怖心がありました。世渡り上手なんて、およそ私は、相応しくないとするか、自分でできないということをも自分で思っていましたから。そんな人間が社会の中でどうやって、卒業してから生きていけばいいのか。自分はどこに居場所を見つけたらいいんだろうかと。それで、私の場合には結局——法学部でしたから、法学部で将来的に私がやっていけそうなところはと思つたら——それは裁判官になるかと。裁判官というのは独立ですから。誰にも干渉を受けない。自分の良心とそれから法律と、全人格をもつてことに当たる。人を裁くのではない。法律に照らして、この人はどういう罪に当たる、この人はどういう量刑に相応しいということを法律に照らして判断するアンパイヤなんです。主観で判断するのではない。それを間違わないでください。

「どうして、人が人を裁けるんですか？」

と、よく私も学生時代に思いました。人からも質問を受けます。

「人を裁くなんていうことができるんですか？」

「いや、誰もできません。でも、現実の世の中で本当に裁く人がいなければ、この世の中はどうなりますか。無秩序そのものではないですか」

と。そうすると、誰かがその役割を担わねばならない。その役割を担わされる。

私はその役割は祈りでしかもちこたえられないと、自分は思っている。裁判官の方から、私は立場上、いろいろそういうことについて質問を受けたりしました。



「奥田裁判官はどういうふうにお考えですか？ どうしておられますか？」と聞かれると、

「私は現実になんかそういう裁判に携わったことはないけれども、アドバイスできるとしたら、祈ってください。どうしていいかわからないときは、祈ってください。あなた方は、どなたか祈る相手をお持ちなんではないですか。私は祈る相手がいないくては、生活できないんです。私の場合はキリストです。だから、キリストにお祈りしています。キリストに本当に『助けてください。この馬鹿者をあなたが助けて、あなたの知恵で道を開いてください』と。そうやって今日まで経てます。あなた方も、裁判官の方々なら、さぞかしいろんな悩みをお持ちで、いろいろ、『助けてください』という方を持っているはずです。持っていなかったら、今からでも探してください」

と。若い人にも、年輩の裁判官の方にも、みんな同じことを私は言うんです、それを探してくださいと。

今までの裁判官像というのはきつと、上の裁判官は何もかもできて、下の方から質問を受けたら即座に悩みに答えるという、そういう裁判官像だったかもわかりません。私はそんな裁判官ではありません。私は無力です、私には知恵がありません。私は空っぽで、ただただ誠実でありたい、これが願いです。誠実でありたい。偏見なく、正しいものを正しいとし、間違っているものを間違っているとする。曇りなき目で見たい。しかし、人間です。だから、

「どうぞ曇りなき目を与えてください、正しい判断をさせてください、見つからない答えはあなたが与えてくださいますように。『探せ、そうすれば見いだす。求めよ、そうすれば与えられる』と。それを、どうぞ、私の仕事において成就じょうじゆしてください」

と祈る。自分の生活と関わりない御言というのは、当面私には関わりがない。私には毎日毎日の生活に直接関わってくださいる御言、これが私の支えであり生命ですから。それをただ告白するだけなんです。

### ●牢屋の中に居ても自由

ずいぶん、前置きのことを話しておりますけれども、今日初めてここに参加される方もいらつしやるので、昨日は、そこにありますように、「全き自由」という主題でお話をいたしました。いくつかは私は自分で用意もしてきましたんですが、もうそんな用意なんかはどこかへ吹っ飛んで、ここでしゃべる時はいつも、流れのままにしゃべっていますので、いろいろと申し残していることがありました。

それから、御言の方も、ちよつと確認しておきたいと思えます。先ず、昨日、聖書朗読で読んでいただいたのはヨハネ伝8章31節のところでした。



「<sup>31</sup>爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。』<sup>32</sup>また真理を知らん、而して真理は汝らに自由を得さすべし」(ヨハネ8・31～32)

私たちは本当に「自由」にあこがれています。自由というものは、もう私たちの根源的欲求です。子どもたちだってそうですよ。子どもたちだって本当に根源的欲求としての自由を欲する。しかし、子どもたちは自分の欲望のままに、己が欲するままに振る舞うという、それが子どもにとつての自由です。これは子どもにとつては、ある程度は必要です。でも、またある時には、たしなめなければならぬこともあります。

我々、大人になってきますと、その自由というものは暴走することがあります。己自身に欲望の塊であつたり、自我に囚われているものが、

「思いどおりのことをやれ」

と言つたら、これはどんなことになるかわからない。本当の自由というのは、己を完全に律することができる人間にのみ与えられる特権であるはずですよ。孔子は

「七十にして心の欲する所に従つて、矩を踰えず」

と言いました。「矩を踰えず」という。我々の場合はどうかといいますが、いろんな外的な不自由からの解放、まずそれを一番に自覚する。束縛から解放されたいという。「規則、規則」でがんじがらめになっている中学校なんかでは、まず生徒たちは、

「規則撤廃。自由にさせてくれ」

と言う。

「それでは、あなた方は自分でそれをやれるかね。規則なしで、あなた方はきちんと

と品位ある生活ができるかね。やれるならやってごらん」

と。撤廃しますね。そこで子どもを信じて、やらせます。そして、見事にやつたら、

「あなた方は素晴らしい」

と言つて誉めてやつたらいい。

そういうことで、まずは、いろんな規則、外的な束縛から解放されたい。いろんな不自由がありますから、解き放たれたい。それから、更に言いますならば、我々のいろんな思い煩いですね。己自身に関する思い煩い、家族に関する思い煩い、いろんな思い煩いがあります。職場の中では、職場の人間関係。家族の中では、家族の人間関係。「三世代住宅」なんてね、きれいなことを言ってますけれども、あれはひどいですよ、同じ人間が顔を合わせたらね。そう思いますよ。みんな、人間というのは、自我と自我のぶつかり合いの中で生きていますからね。それでは、孤独になれば本当の自由かというのと、物足りない、寂しい、やっぱり人が恋しいという。人が集まれば、またいろいろぶつかり合う。これはしょうがないんですね。要するに、そういった様々な思い煩い、そういったものからの解脱です。我々が本当の自由を得ようと思うならば、この解脱の状況にならないといかん。解脱の情



況は、外の環境には左右されないということです。

パウロもシラスも、牢屋の中に居ても自由だった。酷い仕打ちを受けて、牢屋につながれた。囚人たちは、機おりあらば逃げだそうとしている。その夜中にパウロとシラスは神を讚美して祈っていた。囚人たちもじつと耳を傾けて聞き入っていた。そしたら、凄<sup>おそろ</sup>い地震が起こった。これは天使がそこを震い動かしたんです。そして、囚人たちの鎖もパウロの鎖も全部、解けてしまった。そのことに気付いた獄卒たちは、囚人たちはみな逃げてしまったと思つて自害しようとした。そしたら、明かりを灯して見たら、誰も逃げていない。パウロは、

「誰も逃げていないから、自害することはないですよ」

と言った。これがパウロの自由ですよ。牢屋に鎖で繋がれていても、魂は、心は翔かけていてるわけです。そして、主を讚美していた。本当に讚美していた。囚人たちがそれに聞き入っていた。そこはもう別世界が実現していました。だから、地震が起きて鎖が解けても、誰一人逃げだそうしなかった。そこで、その獄卒たちは、特にその中の一人だつたと思ひますけれども、それが本当にパウロに感動して、その晩、パウロの打ち傷を洗つて、そして全家族がパウロによつてバプテスマを受けた。クリスチャンになつてしまった。これはピリピの教会の始まりのところですよ。使徒行伝16章に出てきます。

### ●キリストに在る自由

そんなふうには、パウロはキリストに在る自由をいただいていた人です。私たちは身体は不自由です。うちの孫も不自由です。お歳を召してくれば当然、不自由になります。いろんな障害の方もいらつしやいます。そういう外的なものはそのなりに、私は医学の力で克服していただきたいけれども、我々はどんな環境、条件、どこでありましようとも、キリストをいただくならば、本当に自由人なんです。キリストはあらゆる束縛から、あらゆる運命環境から、もう現に今、解き放つてくださっているんです。だから、

「キリストは自由を得させんために我らを解き放ちたまへり」

と。これはもう現在完了なんです。十字架ですべての束縛を、己自身も含めて全部、解決してくださつた。最も不自由なのは、実は己自身なんです。己自身のうちなるものが実に呻うめいているんですよ、解き放たれたいと。自由に羽ばたきたいと。何ものにも左右されない、常に燕つばめが空を自由に飛んでいるような、そういう姿でありたい。外的条件を整えようとしたら、これはどこまでいっても整えられません、新天地が来るまでは。けれども、キリストというお方に自分を全托して預けていく。いや、キリストの方から

「お前の中に入りたい。私がお前の中に入れば、まことにあなたは自由になる」

と。これがこのヨハネ伝の御言なんです。

「汝ら、わが言におらば」

と。言とキリストと霊とは一つですから。



「わが言は霊なり、生命なり」

とおっしゃった。だから、

「私が常にあなたのうちに宿っているならば」

と。今は見えないキリストですからね、霊なるキリストが御言と一緒に、

「私の言が常にあなたの中に宿っているならば、私という真理と一つになるならば、あなたは自由だ。真理は汝らに自由を得させよ」

と。キリストがあなたに本当の自由を得させてくださる。ユダヤ人は

「どうして、そんなことをおっしゃるんですか。私たちは決して人の奴隷ではありませんよ。私たちは自由ですよ」

と言いました。それに対してキリストはおっしゃった。

「<sup>34</sup>……すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり」

と。「罪」ということをおっしゃったけれども、私たちはもつと言うと、「己」ということ。己というものの奴隷になっている。己というものに囚われている。結局、己なんです。それに囚われている。誰かに変なことを言われて、

「腹が立つてしょうがない。侮辱された」

と。この己です。それは腹は立ちますよ。けれども、

「放っておけよ。あいつは何もわからないで言っているのだから。戯言を言っているのだと思いなさい。あなたは自由だ。あなたは崇高なる人格だ。人が何と言おうと、そんなことは——」<sup>かえろ</sup>「蛙のつらに何とか」という言葉があるそうですけれども——放っておきなさい。何がきたって、放っておきなさい。あなたはもう贖われて、素晴らしいあなたがそこにあるんだ。なるほど、過去のあなたはボロクソに言われてもしようがないかもしれない。言わせておいたらいいよ」

と。法律の世界は違ふんですよ。過去の罪だつて、過去の自分のマイナスだつて、それをあからさまに指摘して暴露しましたら、それは名誉毀損罪<sup>きそん</sup>になります。もっぱら公益をはかるという崇高な目的のためだつたら許されるけれども、たとえ真実であつても、それを人の前で言うことは罪になりますから、気をつけてくださいね。それが法律の世界です。

キリストの方は、「言わせておけ」と。キリストご自身がどんなに悪しざま言われたか。福音書を見ればあきらかです。キリストの方も負けていませんよ。マタイ伝23章をごらんください。

「あなた方、宗教家は災いだ。あなた方は人々に背負いきれない荷物を負わせながら、指一本触れようとしないではないか。あなた方は偽善者そのものではないか。口では素晴らしいことを言いながら、心の中は欲と何とかで満ち溢れているではないか。あなた方は白く塗った墓のようではないか。うわべはきれいだけれども、ひとつ掘り起こしたら、骨や穢れ<sup>けが</sup>がうじゃうじゃ出て



くるではないか」

と。キリストの言いたい放題な言葉が集められていますよ。あんなことを言ったら、十字架もしようがないと思うくらいにね（笑）。まあ、あれはなにも一時におっしゃったのではないけれども、マタイ伝というのは、いろんなところでおっしゃった言葉を集めているんです。<sup>たとえばなし</sup> 講話は13章、キリストのパリサイ人攻撃は23章とか、そういうところに集められている。キリスト語録ですよ。本当にあそこまで言わなくてもいいと思うくらい、キリストはズケズケと言っておられる。キリストにズケズケ言われたら、「はい、そうです」と言えば素直なんですからけれども、彼らはますますキリストを殺そうとする。これが人間の性<sup>さが</sup>でしてね。

### ●自由の御霊

ですから、人に対してものを言うときは、よほど心得て言わないとね。本当を言えば通用すると思つたら、そうじゃない。本当のことを言うことによつて人が傷ついたら、今度はどんな反撃が返ってくるかわからない。正義感のあまりに本当のことを言つて、それで逆に殺される人がいろいろあります。これは尊い犠牲といえは犠牲ですけれども。この世の中というのは、そういう現実です。

「あなた方は蛇のように慧<sup>さとし</sup>く、鳩のごとく素直であれ」

という。「蛇のように慧く」ということをクリスチャンはよく心得ていただきたい。キリストは賢いですよ。うまくすりぬけて、最後の時がくるまでは、敵に言質<sup>げんち</sup>を与えておられない。

「カイザルに貢<sup>みつぎ</sup>を納めることは正しいでしょうか？」

と問われて。もし「納めよ」と言つたら、「ああ、これはローマの手下ではないか」と。「そんな貢なんか納めなくていい」と言つたら、「ローマの反逆者だ」と。どっちをとつてもアウトな答を彼らは用意して、キリストを陥<sup>おとし</sup>れようとした。キリストは、

「その銀貨を見せてごらん。誰の絵が書いてあるか？」

「カイザルです」

「カイザルのものなら、カイザルに返したらいいじゃないの。神さまのものは神さまに、カイザルのものはカイザルに」

と言われた。それがもの凄い有名な言葉になって、政治哲学者の永遠の主題になっているんですよ。キリストは、そんな深刻な思いでおっしゃったとはとても思えない。

それから、姦淫の現場で捕らえられた女性が連れられてきた。

「イエスさま、これは現行犯で逮捕しました。引きずり出してきました。モー

セは、現行犯は石打ちにしろと教えています。あなたはどうか思いますか？」

と。律法を大事にしろとおっしゃったキリストなら、「石打ちに」という判決をくださざるを得ない。



「いやいや、そんなものは可哀相だから赦してやれよ」と言ったら、

「モーセを否定なさるのですね、あなたは。我々の大事にしてきたそれを否定なさるのですね。そうなんですな」

と。これも、どっちにしろんでもダメ。キリストはどうしておられたか。地面に屈み込んで、字を書いておられた。そして、彼らがもう暴発寸前になった時に、スクツと立ち上がって見渡して、

「この女性を石で打つ資格のある者、これは石を投げなさい」

と、そう言い放って、また字を書いた。そうすると、福音書によれば、年寄りから一人ずつ離れていった。年寄りというのは、齢を重ねるといことは、それだけ罪を犯してきたということですからね。年寄りから順番に一人ひとり去っていく。あと気がついてみたら、その女性しか残っていないかった。それで、キリストは言われた。

「あなたを罰する人はいないのか」

「はい、誰もごさいません」

キリストは、

「私もあなたを罰しない。もう重ねて罪を犯さないように」

と、そうおっしゃった。ああいうキリストの場面にでつくわしますと、私は本当に涙が出ますね。キリストは女性と一緒に泣いておられたと思います。石打ちにされて当然だと、そういう思いで女性は引つ張りだされてきた。キリストは、そういう女性を引つ張りだした人の根性をもつと憤られたと思う。人が寝ているところへずかずかと踏み込んでいって、そして連れてくる。しかも、男は来ない。女性だけを連れてくる。そういう根性をキリストは非常に憤られたと思います。それとともに、その女性の心になって、キリストは本当に涙を流しておられたと思う。そして、

「あなたの償いは、それは私がするから、心配しないで行きなさい。私が背負ったから」

と。キリストは自分が十字架で、いかなる審判も全部受けとるといふ。それがありますから、あらゆる罪を赦された。神に逆らう罪はダメですよ。聖霊に逆らう罪はダメです。それでも、

「本当に悪うございました」

と言っている人たちの罪は、どんなものであっても、全部引き受けられた。ルカ伝23章に出てきますのがそうです。キリストの十字架の両方に二人の盗賊がいて、始めは二人とも罵つていたようにマタイ伝では書いてます。けれども、ルカ伝では、片一方の盗賊は他方をたしなめて、

「俺たちは、過去の報いをこういう十字架ということで受けとるのは当たりま

えだ。でも、まん中にいるお方は違うんだ。このお方の前では口を慎め」



と。そして、

「イエスさま、不思議なご縁でこうして一緒にできたことをありがとうございます。ありがとうございます。あなたが御国にお入りになる時、私が横にいたということを思い出してください。」

自分が天国へ往けるとも思わない。救っていただけるとも思わない。

ただ、不思議なご縁で同席できたことだけで私はもう満足です。私のことを覚えてください」

と。そうしたら、キリストは、

「今日、汝、我と共にパラダイス！」

と、直ちに宣言された。小池先生は

「その御言が一番自分が好きな御言だ。自分のお墓にはそれを書いてくれ」

と言われた。「今日、汝、我と共にパラダイス！」と。つまり、いかなる状況にあっても常にパラダイス。これが本当の自由なんです。いかなるところにあってもパラダイス。キリストと一緒にいてくださるところがパラダイスです。

我々は、不思議なことに、不自由に造られてしまった。死ぬように定められています。ご飯を食べなければ、生きていけないように造られています。「完全」というようなことはあり得ないんです。100歳、120歳、150歳、いつまでか知りませんが、必ず枯れ果てていきます。そういうふうには有限なものとして造られた。しかし、有限なものの中で本当の無限を宿せと。

「有限の中に無限を宿せ。それは私である」

と。ああして、十字架で砕かれて、そして陰府にくだり、そして栄光の姿となって現れて、天に昇られ、今度は一人ひとりの中に同じ霊を注いでくださる、そのキリスト。御霊のキリスト。この方が本当の自由の実質なんです。

「御霊の在るところに自由あり」

なんです。御霊は凄い知恵を持っておられる。あらゆるところを切り抜けていく知恵をもっておられる。殉教する時は殉教しました、弟子たちは時がきたら。しかし、その時までには絶対守られていました。そういうキリストの霊というのは本当に自由自在の霊であって、生命の霊であり、愛の霊であり、執り成しの祈りをしてくださる霊です。この御霊のキリスト、これが自由の本体です。

ですから、十字架は入口です。十字架を通って、聖霊という自由の霊が一人ひとりに無条件に宿ってください。あなたの方の中で、この自由の御霊、聖なる御霊、それを妨げるものは全部吹っ飛んでいるんです。生身の我々だったらダメですけれども。キリストがもうぶっ飛ばしてくださったから、神さまの前であなただ方はまことに神の子として素晴らしい存在に変えられてしまっている。そこにキリストの霊が宿る。



そうすると、我々はマイナス99でありましたが、キリストというプラス1、これが絶えず力を発揮して、マイナス99を吹っ飛ばしてしまおう。それだけのもの凄い力を持っている。それが、さきほど讚美歌（召団讚歌A20「信じ入れば」）を歌いましたね。

「主の御霊こそ原始力ぞ」

と。あれは小池先生の讚美歌の傑作です。京都においでになったときに、あの歌は作られたんです。お帰りになってからだったかな。あの時の先生の講筵の内容は『エン・キリスト』第2号に私がまとめて書いてますから、またご覧になってください。素晴らしかったですよ。

### ●愛への自由

そういうことで、本当にこの御霊こそは原始力です。そして、自由の御霊です。それがさきほどの「自由」の補いです。

「<sup>36</sup>この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん」

と。「実に自由とならん」という。

それから、今度は、ガラテヤ書5章の方にいきます。

「キリストは自由を得させん為に我らを釈き放ちたまえり。然れば堅く立ち

て再び奴隷の軛くびきに繋がるな」（ガラテヤ5:1）

この「奴隷の軛」とは、パウロにおいては「律法」という呪いだつたわけです。もうそのことは昨日、さんざん言いましたので、言いません。13節にいきますと、

「<sup>13</sup>兄弟よ、汝らの召されたるは自由を与えられん為なり。」

あなた方は自由を与えられたために召された。縛ったり苦しめたりするために、神さまはあなた方をお選びになったのではない。あなた方を本当に生き生きと自由に生きるようにとお召しくださった。

ただ其の自由を肉に従う機会となさず、反つて愛をもて互に事つかえよ。

聖書でパウロが「肉」と言いますときには、これは生まれながらの自我、自己中心な性向、そういうものを「肉」と言っています。神さま中心に生きる生きざまを「霊」と言っている。

「霊の思いは生命なり平安なり。肉の思いは死なり」

という言葉がローマ書8章のところに出てきます。その自由を肉に献げないで、本当に神中心に生きていきなさい。それは愛をもつて互いに仕えるという道だよと。だから、本当の自由というのは、愛への自由です。自分が主さまによって満たされ溢れているからこそ、人のために執り成し祈ることができる。そういうことです。それから、

<sup>16</sup>我いう、御霊によりて歩め、さらば肉の慾を遂げざるべし。

これは「霊によりて歩め」ということ。聖書の原文では「聖霊」というその「聖」というのはなくて、ただ「霊」となっているそうです。その霊の歩みをしろと。そうすれば、肉には支配されないからと。



17 肉の望むところは靈にさからい、靈の望むところは肉にさからいて互いに相戻ればなり。

水と油だと。

18 汝等もし靈に導かれなば、律法の下にあらじ。

靈中の靈でありたもう聖靈に導かれていくならば、もうあなた方は律法の下にはない。全く自由人だと。そして、肉の行いというものがそこにずらずらとあがっています。こんなものからはあなたはもう無縁になつているんだと。

21 ……我すでに警めたるごとく、今また警む。斯ることを行う者は神の国を嗣ぐごとなし。22 然れど御靈の果は

これは御靈が結ばせてくださる実です。

愛・喜悅・平安、寛容・仁慈・善良、忠信・柔和・節制なり」（ガラテヤ5・13～22）

こういつた徳目ですね。こういつたものが本当の、御靈の結ばせてくださる実だという。我々キリスト者はもう既に、肉だとか情だとかというのは十字架で滅ぼされてしまっている。根源的にそれはもう滅ぼされてしまっているんだから、そんなものに支配されない。だから、靈によつて生きる者は靈によつて歩もうと。そういうことを言っております。

そして、ついでながら、6章7節から、

「7 ……人の播く所は、その刈る所とならん。8 己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、靈のために播く者は靈によりて永遠の生命を刈りとらん。

肉中心に生活を構成している人は結局は滅びを刈り取る。けれども、靈に導かれ、靈中心の生活を志している者は永遠の生命を刈り取る。これは本当に真理ですからね。各人の生涯は、

「人間は棺桶に蓋をするまではその人は評価できない」

といえますけれども、棺桶に蓋をしたときに、その人はどんな生涯を歩んできたかと。それをこの御言に照らしてみたら——100%と言えるかどうか、私はまだ統計をとっておりませんので言えませけれども——まずは間違いないです、これは。

「肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈りとり、靈のために播く者は靈によりて永遠の生命を刈りとる」

と。だから、

9 われら善をなすに倦まざれ、もし撓まずば、時いたりて刈り取るべし。10 この故に機に随いて、凡ての人、殊に信仰の家族に善をおこなえ」（ガラテヤ6・7～9）

と。我々はキリストによつて贖われて、神の子とせられました。無条件です。善行を積ん



で神の子になるのではない。けれども、神の子にされたら、キリストの霊が宿れば、ひとりに善行をせざるを得ないんです。てもちぶたさでは困ります。忙しくなりますよ、本当に神さまの愛を求めてる人がいっぱいいますから。助けを求めている人がいっぱいいます。そんなに休ませてはくれませんよ。お休みはキリストの懐の中で適当にください。肉体を持っている我々は無茶はいけません。けれども、必ず復元する時間をいただき、ここで復元する。不思議なことに、我々はキリストに在るならば、決して、いわゆる失業して遊んでいるということはありません。

私たちは70歳くらいになりますと、同窓会をやる。そうすると、

「自分はゴルフ三昧さんまいをやっている。文化教室に行つて、勉強している。ダンスをやっている」

とか、いろいろなことを言つてね、

「豊かだよ、豊かだよ」

とやつてるんです。私はそのたびにこのガラテヤ書を思いながら、

「肉に播く者は肉から滅亡だよ」

と言いたいたけれども、機嫌良くやつている連中に、そんなことを言うことはないから、黙つています。

「奥田君、君はいまだに忙しいね。気の毒だね」

「はあ、気の毒ですね」

とか言つてるんです。だから、私は、日本の社会は残念なんです。

「お年寄りを大事に」

とか、何かまるで、この世の仕事から解放されて、何々三昧の生活をするのが理想社会みたいに思われているでしょ。あれも大ウソですからね。「生き生き」の日野原先生に学んでください。やっぱ、日本には、本当のキリストの素晴らしさというのは知られていないから、何かこの世的な、孫たちに囲まれて、

「お爺ちゃん」

とか言われて、ちゃんちゃんこを着せられて、ニコニコしているようなものが幸せだと思つたら——それも一部かも知れませんが。家族に囲まれているのは幸せです——けれども、それらこれらを支え包み、希望をもつて前に進ませてくれるものがなかったらね。

「お爺ちゃん、だんだん、先が短くなつてきたね」

なんて孫が言つたら、どうしますか。親が

「そんなことは言うんじゃないよ。それは本当だけど、言うんじゃないよ」

とか言つて（笑）。そうでしょ。そういう偽りの中の偽りの繁栄ではつまらんです。

そういうことで、自由ということは、御霊に在つて本当にくださる。しかも、御霊は千変万化して我々の助け主、守り主です。一人ひとりの守護神です。



「守護神」という言葉がこの頃はやりますね、プロ野球で。「クローザー」とか「ストッパー」とか言いまして、最後の一回を守ってくれる。一点差のときにピンチが来たら、出ていって、バタバタと三振に打ち取り、そして、きちっと押さえてくれるを「守護神」というんですけれども。巨人の守護神はダメです（笑）。「貧乏神」だと言ってるんです、私は。でも、キリストという守護神は、これはもう絶対ですよ。これは常に我々を守ってあります。そして、ピンチになれば、本当に力を発揮してください。

「御霊、言いがたき呻きをもて執り成し給う」

という。そういうことで、我々はキリストのところへ来れば、問題なしなんです。本当の自由はそこにあるということをお願いしたい。

### ● 神の栄光にあずかる希望

それで、今日は「希望」です。確かな希望。希望に関する御言をずっと拾い上げてみますと、実にたくさん出てきます。さきほどのローマ書5章1節から5節のところ。2節、

「私たちはキリストによって今立つところの恵みにいることを許していただいた。そして、神の栄光を望みて喜ぶなり」

と。ここですね。「神の栄光を望みて喜ぶなり」と。そのように私たちに土台を与えてくださったのがキリストです。私たちはキリストを受け入れた。キリストに結ばれた。キリストと本当に一如の恵みをいただいた。そうすると、希望が湧いてくる。本当の希望が湧いてくる。それは自分が何か立派になろうとか、自分が輝こうとかいう希望ではなくて、むしろ、天国に向かって、

「神の栄光を望みて喜ぶなり」

とあります。

ところが、フランシスコ会というところから出てます訳にはこんなふうにしてあります。す。

「わたしたちは、このキリストのおかげで、今そのうちにある恵みの状態に、信仰によって立ち入ることが許されました。キリストのおかげで、そういう恵みの状態の中に入れていただきました。神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」（ローマ5:2）

と、こういう訳をつけている。「神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」と。文語訳や口語訳では、

「わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる」（口語訳）

「また彼により信仰によりて今、立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり」（文語訳）



「神の栄光を望みて喜ぶなり」と。「喜ぶ」という訳ですね。私はどれがギリシア語的に正しいのか知りませんが、両方とも結構だと思つてます。神の栄光を望みて喜ぶ。神の栄光を、何か客観的なものとしてそれを喜んでいっているというよりも、このフランシスコ会訳では、神の栄光に我々自身があずかる。神の栄光にあずかるという希望を誇りにしている。これもなかなか捨てがたい良い訳だと思います。

神さまはご自分だけが輝いて、満足しておられるようなお方ではない。神さまは、ご自分の栄光は必ず私たちにも分かち与えたい。我々だつてそうでしょ。何か人さまからおいしいものをいただいたり、お土産をいただいたりしますと、必ず、子どもたちに分かち与えますよ。みんなで一緒にいただきましょう、みんなで食卓を囲みましょう。そうでしょ。もし、私がもらつたんだから、誰にもやらないといつて、自分で食べていたら、ぶくぶく太つて、そして、病気になつて死にますよね。やっぱり、分かち与える。

「受くるよりも与うるは幸いなり」

と言われたように。神さまというのは、ご自分で栄光を独占できないお方なんです。生命も、喜びも、すべてを我々に等しく、分かち与えよう、分かち与えようとしておられる。それを無条件でいただく土台をキリストは十字架で据えてくださった。私たちはもう、十字架のキリストさまをいつも目の前に、あるいは我がうちに、いただいていますから、そうしますと、懼れなく、神さまの中へスーツと入つていけるんです、神さまの御国にも、あらゆる素晴らしいところにも。

「はい、身分証明書は？」

と言われたら、

「はい、十字架です。私には十字架が立っています」

と。それが身分証明書ですよ。「洗礼を受けました」とか、「いや、こんなことがありました」とか、そうじゃなくて、私は

「我、主と共に十字架せられたり。もはや、我生くるにあらず」

と。そう、そのところをさきほど申し上げるのを落としました。ガラテヤ書2章20節、

「<sup>20</sup>我キリストと偕に十字架に付けられたり。最早われ生くるにあらず、キリ

スト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛し

て我がために己が身を捨て給ひし神の子を信するに由りて

神の子を受けとるによりて、

生くるなり。<sup>21</sup>我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること

神さまに受け入れられることを、「義とせらるること」と言います。

律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり」（ガラテヤ2・20～21）

もし、神さまに受け入れられることが律法の道——自分を完成していくという道——そういう道によるならば、では、キリストが死んでくださったのは無駄だったねと。キリスト



は無駄死になさっていない。このキリストの十字架の死があることによって、私たちは無条件に神さまの子とされた、そのことをここで言っています。19節に、

「<sup>19</sup>我は神に生きんために、律法によりて律法に死にたり」

と。律法によって自分は殺された。旧き我は律法によって死んだという。死んだ人間は、律法はもう支配しない。霊的、肉体的にパウロは本当に律法の重荷に耐えかねて、律法によってつぶされて、そして、律法によって死んでしまったと。だから、もう律法はもはや私を支配しない。しかも、それは、あえて自分から

「律法に対しては死んだ」

と、ここで宣言しました。それは神さまに生きるためだと。神さまの中に生きるために。パウロは十字架によってもう旧い自分は片付けられた。この十字架で片付けられた自分を律法は支配しない。

二重の意味を持っています。律法にぶつつぶされて、律法によって息の根を止められるばかりに、仮死状態にあつたという。自分の魂は呻吟していたという。我々も旧い我々はそうでした。己自身がまるで、律法というもの、道徳というもの、良心の呵責というもの、そういったあるべき何かによつて、私たちは圧迫されて、もはやもう仮死状態にあつた。それが一つ。

それから、そういう我々をキリストは十字架で完全にもう一緒に死なせてくださった。キリストが十字架で死に給うとき、私も実はそこで一緒に死んでいたと。キリストの無理心中でしょうかね。キリストの無理心中。キリストは我々と一緒に抱きかかえて十字架についてくださった。だから、そこで私たちはもう葬られた。死んでいる。だから、

「もはや私は生きていない」

「でも、肉体をもつて生きていないか」

「そう、生きていますよ。確かに生きています。けれども、それはもう過去の自分ではない。キリスト、その方だけを見ている。その方の中に、その恵みの中に生かしてもらつて生きています」

と。そういうことが今日の次のところに出てくるんです。

「<sup>20</sup>我キリストと偕に十字架に付けられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内にありて生き給うなり。今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我がために己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。」

復活のキリスト、御霊のキリストが私の中に在って生きてくださっている。今、私が肉体をもつて生きているのは、私を愛して私のためにご自身を捨ててくださった、そのお方を信受——身体の中に受け入れる。「信ずる」ということは見えない事態ですから、「信ずる」という表現をしますが、それはそのまま身体の中に受けとる、しかと受けとる——受けとることによって、私は生きています。そういうことです。



21 我は神の恩恵を空しくせず、もし義とせらるること律法に由らば、キリストの死に給えるは徒然なり」いたずら（ガラテヤ2・20～21）

私は神の恵みを空しくほしくない。もし、キリストぬきで神さまの中に入れていただけるのなら、キリストが死なれたのは無駄だったね、絶対にそうではないと。逆に、キリストの十字架の死があることによって、いかなる人も無条件で、このキリストの十字架という門を通して、御国に招いていただいている。

「招いていただける。それはあなた次第だ」

と。人間は人格ですから、神さまは無理に押しつけはなさいません。

キリストが福音書の中でいろんな方に出会っておられる。その時に、

「汝、何を欲するか？」

と。「あなたは何をしてほしいのか？」と、必ず注文を聞いておられるんですよ。無理に「こうだ」と、おっしゃらない。「何をして欲しいか」と。それで、さすがにキリストはこちらの願い以上のことをしてくださるんですけれども。決して、無理やりに押し付けたりはなさっていません。

「目が見えることです」

「では、見えるように」

「立たせていただきたいんです」

「では、立つように」

と言って。

「罪を赦していただきたいんです」

という思いをもってきた中風の人に対しては、

「汝の罪赦されたり」

ということを先におっしゃった。あれは仲間たちは中風の人を中風という病気を癒してほしいと思って連れてきたんだけど、彼は心の中で、中風よりもっと大事な自分の心の解決、それを求めていたと私は思うんですね。それをキリストは見抜いて、

「汝の罪赦されたり」

と先に宣言された。それから、

「立って、床を取って帰りなさい」

と言って、次に身体の癒しをなされた。

キリストという方は、本当にこちらが何を欲しているか、何を求めているか、それを全部ご存知なんです。多くの場合に、そうやって尋ねておられます。たまたま、あの中風の人のときには、友だちが担いできましたから、キリストの方から先に

「罪赦されたり」

と宣言なさいましたけれども。



本当にキリストは私たちの思いを知ってくださっている。今、御霊のキリストは私たちの思いをすべて、ことごとくご存知です。そして、執り成して祈ってくださっています。

● 苦難は希望を生みだす

今晚の集会は、「御霊の祈り」というのが主題ですが、

「御霊、言いがたき呻きをもて執り成したもう」

という。すべて、神さまから出て、神さまに帰っていく。イザヤ書にあります。雨は天から降って、地を潤して、そしてまた蒸気となって昇っていく。しかし、ただ降って昇るのではなくて、地上にある間にいろんな恵みの業をする。田畑を潤し、生命を与え、そしてまた天に帰っていく。そのように、神の御言も空しくは天に帰らない。必ず地に下って御業をなして天に帰っていく。キリストはそれをしてくださいました。天から地に下って、そして、あの御業をなしてください。そして天に昇り給うた。しかも、天界からまた聖霊という姿で、今度は地上におられたとき以上の素晴らしいことをなさってくださいました。一人ひとりになさってくださいました。そういう方ですから、神さまの御思いというのは常に進んでやまず、展開してやまず。それに我々はあずかっていますから。

先程のまたローマ書5章へ戻ります。そういう恵みの中に入れていただいた。そして、神の栄光にあずかる、そういう希望をいただいて喜んでいる。それを誇りとしている。

「<sup>3</sup>然のみならず患難をも喜ぶ」

これもフランシスコ会訳では、

「そればかりでなく、苦難さえ誇りにしています」

と。不思議に、「喜ぶ」というのを「誇る」と訳している。いいですね、キリストを誇る。患難さえも誇りとする。なぜかというと、

「そは患難は忍耐を生じ、<sup>4</sup>忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり」

（ロマ5：3～4）

これもフランシスコ会訳では、

「苦難は忍耐を生み、忍耐は試練にみがかれた徳を生み、その徳は希望を生み

出すことを知っています」

これもなかなか穿<sup>うが</sup>つた訳だと思う。苦難は忍耐を生み出す。忍耐しますと、忍耐というのはただ耐え忍んでいるのではないんですね。何かそこで鍛えられている。

「忍耐は試練にみがかれた徳を生む」

という。「徳」というのはひとりに出てこない。いろんな艱難、試練、そういうものを通して、その人の中に形作られている人格、そこから発する何ものか。それが徳というものだと思う。だから、いろんな苦難に出会った人、それを乗り越えてきた人、その人には一味ちがった何か素晴らしい味がある。何も苦勞していない人は凡庸<sup>ほんよう</sup>な、たるみきつたお姿



のように私にはうつります。

「お幸せでしたね。しかし、凡庸ですね」

「いや、凡庸の方がいい。幸せならば、凡庸がいい」

と、多くの人はおっしゃいます。

私の叔母が89歳だったかな、亡くなりましたけれども、

「昌道みたいな、あんなにいろんな試練が出てくるなら、もう結構だ。凡庸でいい

から、そういう試練がなして過ぎたい。気の毒で、見ておれん」

と言っていました（笑）。私のことを心配してね。それでも、私のことはもう信頼しきっておりました。私からみれば、その叔母自身がやはり、口に出さないけれども、いろんな試練を通して磨かれていった人だと思っています。最後まで、人にべったり寄りすがたりすることは断乎退けて、自分を貫いた。

「病院には入らない」

と言って断りつづけた。天に召される当日です、やつと無理やり入院ということになって、それから二時間後に息を引きとったということですから。回りの人はみんな、

「あんな死にかたをしたいわ」

と言いましたよ。要するに、自分を貫いた人なんですけれども、人にそんなに迷惑をかけるので、90近い生涯を貫いた人でした。

ですから、ここに

「患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずる」（ロマ5:3～4）

と。あるいは、

「苦難は忍耐を生み、忍耐は試練にみがかれた徳を生み、その徳は希望を生み

出す」

と。どつちだつていい。要するに、いろんなことのでつくわしても、最後にはそれが希望へと、希望へと変わっていくということなんです。世間は絶望へ変わる。

「なんで、私はこんなについてないの。次から次に、これでもかこれでもかと、

私はいじめられている。誰がいじめめるの？ 知らん。運命がいじめめる」

ということ、ふさぎこんでしまう。それが行き着くところが自殺ということになります。つまり、自分で自分のこの世の生に対して愛想をつかして自殺するという。ところが、福音の世界は、試練に合えばあうほど、その人は磨かれて輝いて、希望となつて、本当に天国のリアリティーが来ているという、そういうことになるんですね。つまり、この世的事物に対してはもうあまり望みをおかなくなる。それこそ、当てにならないから。それよりも確かなるものによつて、グツとつかまれて導かれて、

「見よ、天国の輝きを」

と。



## ●神の愛が心の中であふれ出る

クリスチャンの方の臨死体験の本なんかをみましても、本当にそういう死の苦しみの中で意識を失って、気がついたら天国への道をずっと行っていると、暗い所を通っていたら、向こうに光が見えてきて、

「あつ、天国があそこにある。もう入りたい。入れてほしい」と言ったら、

「いや、まだ、あなたには早い」

と言って追い返されるそうです。

私たちの集会のK兄弟もそういう体験をされた。そこでなんと、小池先生に出会っている。知らないで出会っている。あとから、インターネットで小池先生の写真が出てきたんです。てね、「あつ、この人だ」と。これが天国への道の中で或る大事な働きをしておられた。

「あなたはどこへ行きなさい。あなたはこつちへ行きなさい」

と。K君に

「天国へ行きなさい」

と、もの凄く勧められるんで、K君は

「私はそんな器ではありません。私はこれこれの悪いやつで、こんだけ悪いことをやってきました」

と、ありとあらゆることを全部さらけだした。

「困った人だね、お前は」

「なぜ、行けるんですか？」

「御名のゆえに、十字架の故に、キリストの故に」

と、小池先生なる御使がそういうことをメモに書いて、見せられたというんです。

「あつ、そうですか。それでは、行かせてもらいます。いや、ちよつと待つてくだ

さい。奥田先生はどうなるんですか？ 集会の人はどうなるんですか？ 他の人

は？ 自分一人はいやです」

と。先生はいよいよ、

「困った人だね、大丈夫だから、ちゃんとなるから」

と。それで、彼はずつと進んで行って、最後は何か鉄の扉がパツと開かれて、キリストがいらっしゃって、そこで凄いキリストの光に包まれて、キリストと問答してきたと言うんです。それをメモに書いてくれた。そういうことを彼は体験した。

ですから、天国は、キリストのリアリティーというものはそういうものなんです。本当にいらっしゃるんです。決してこの死でもつて終わらない。先生はもう天国でもの凄い働きをなさっている。この集会にもきつと来てくださっていると思います、霊によって。私には本当に強められていると思っと思っています、この特別集会なんかやります時に。そういう天



界からの助けをいただいて、ここで皆さまにキリストの言葉をお伝えしているだけなんです。私の中に蓄積されているものではない。絶えず流れている。だから、活きた言葉なんですよ。それを私の言葉とは思わないで、キリストの言葉と思って受けてくだされば、それは効き目があります。お砂糖を与えても、これを

「眠り薬だよ」

と言つて与えたら、

「はい、先生のいただいたお薬でよく眠れました」

と（笑）。実はそれはお砂糖だった。それは、信じて受けとつたからです。だから、私の言葉ではない、キリストのお言葉だと。本当にキリストのお言葉なんです、聖書の言葉は。それをそのように100%受けとれば、それはその方の中で抜群に効き目を発揮してください。疑つたらダメです。疑えば、もう効き目はなくなります。そういう妙薬ですから、騙されたとおもう。お金はいただきませんから。どうせ、ただですから。

いや、キリストの十字架というものの凄い高価な犠牲が払われている。それを全部、もう払いきつてくださっている。前納金を全部、キリストがやってくくださったから、私たちは何も払わないで、ただくんですけれども、キリストはもの凄い犠牲を払ってくださいました。誰も払えない犠牲を払ってくださいました。そのお陰をこうむっている。お陰さまなんです。そういう現実ですから。

そして、この希望は私たちを裏切ることがない。

「希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に

注げばなり」

と。フランシスコ会訳では、

「この希望はわたしたちを裏切ることはありません。わたしたちに賜った聖霊

によって、神の愛がわたしたちの心の中であふれ出ているからです」

と訳しています。文語訳では、

「神の愛、われらの心に注げばなり」

とある。これも事実です。フランシスコ会訳は、

「神の愛がわたしたちの心の中であふれ出ているからです」

と。泉のごとくあふれ出ている。この訳は気に入りましたよ、本当に。溢れ出ている。泉のごとくあふれ出ると。

「ヤコブの井戸の水を飲む者はまた渴くだろう。しかし、わたしが与える水は  
渴くことがなく、永遠に生命の水がその人から溢れ出る」

とキリストはおっしゃいました。キリストという井戸、これは溢れ出てくれる。あふれ出るから、流れていって、回りの人を潤していくわけですね。



## ●安らかに行きなさい

あのパンの奇蹟のことを昨日お話ししました。五つのパンと二匹の魚で、男だけで五千人——女性と子どもを入れたら一万人——その人たちにパンをさいて与えられた。その時にキリストはパンを、ちゃんと祈って、神さまの前にパンを献げて祈っておられる。祈っておられた時に、そのパンはもはやパンでなくなっていたんです。それは分かち与えられますと、それはキリストの生命となつて、何千人の人にもあふれ流れ出ていった。しかも、

## 「残りのパンくずを全部集めなさい」

とキリストは言われた。十二の籠に満ち溢れたというんです。これはもう明らかに、

「霊の生命は、キリストの生命はやがて十字架で砕かれて、あのパン屑のように砕かれて飛び散るだろう。しかし、それは何千人の人、何万人の人、何億人の人に流れていって、そしてその人たちを生命づけて、なお溢れてやまない」

ということを表しておられるんです。滅多なことで、キリストはそんな奇蹟はなさいません。キリストはハッキリと示されて、そういう奇蹟をなされた。パンの奇蹟です。これは生命を顕わされた。

それから、ラザロを甦らされた。墓に葬られてもう四日もたっている。その朽ち果てたラザロ、それをハッキリとキリストは自覚して、墓の前で

## 「ラザロよ、出てこい！」

と言われたら、ラザロが出てきた。もう二日前にラザロが死んだということを知ってからなお二日間じつとしておられた。そして、やおら旅をして、ラザロのところに来られたら、もう四日もたっていたという。これはちゃんとキリストはもう見えておられる。でも、そのことを通して、神さまは素晴らしいことを教えてくださる、知らせてくださる。そのことをハッキリ受けとって、その御業をなされた。ですから、キリストのなさることには一つ、目的がありますし、それから、それは我が思いではなさってない。全部、父なる神さまの御旨みむねに従ってなさっている。だから、キリストは

「私の業わざではない。神さまが私を通して御業をなさっているんだよ。私の語つ

ている言葉も私の言葉ではない。これは神さまの霊の言葉であつて、これは

霊であり生命である。それを受けとったものは永遠に生きる。人を生かすも

のは霊であり、神の言葉である。いわゆる肉は一時的なことにはしか役立たない」

と。キリストは

## 「肉は何の役にも立たない」

なんておっしゃったから、弟子たちは躓いた。

本当のキリストの次元にふれば、その人は変えられてしまいます。切羽詰まっている人、行き詰まっている人ほど、それはピーンときますからね。聖書でキリストにふれている人はみんな、もう行き詰まってどうにもならん人がキリストにすがったんです。



十二年間血漏を患って、お医者さんにくらお金を持つていって、治してもらおうと思って治療を受けても、全然よくなるなくて、ますます悪くなった。その女性がもう思いあまつて、キリストが旅してこられたときに、群衆が押し合いへい合いしている所に、キリストの後ろからそつと御衣のふきに触った。そして、キリストは

「私から今、力が出ていった。私に触った人がいるね。誰だね？」

と、見渡された。その女性は懼れおののいて、「私です」と言った。つまり、血漏の女性とこののは穢れなんです。そういう穢れた者は神さまの前に出られない。出られないけれども、助けていただきたいと、必死な思いでやってきて、後ろからそつと触った。力が流れていって、その女性の血のもとがたちどころに癒された。癒えたということを実感した。間髪を入れず、イエスさまは

「誰だね、私に触ったのは？」

とおっしゃったから、叱られるのだと思つて、懼れておすおすと御前に出てきたら、

「あなたの信仰があなたを救つたんですよ。安らかに行きなさい」

と言われた。「あなたの信仰が」というのは、

「そこまで必死になつて私にすがつたね。それだよ」

と。あなたの罪がどうのこうの、そんなことは何もおっしゃらない。今、その人が最も必要としているものにズバリとお答えになつて、そして、「安らかに行きなさい」と。それから後のことは何も書かれていません。

そうやっていっているうちに、会堂司のヤイロの娘が死んでしまった。イエスさまがおいでになるといふから、何とか助けしてくれということ、ヤイロがキリストさまにお願いした。それで一緒に来たその道中、家から使いが来て、

「お嬢さんはお亡くなりました。もうイエスさまを煩わすことはありません」

せんから、お帰りいただきたい」

という伝令が来たわけです。ヤイロはがっかりした。そして、イエスはそれを聞いて、

「恐れるな。ただ信するんだ。ただ信じなさい。神さまは御業をなさるから」

と。そして、たどり着かれたら、本当に娘さんが亡くなったので、みんなが泣き悲しんで、大騒動なんです。そこで、イエスさまは何とおっしゃったか。

「娘は死んだのではない。眠っているだけだ」

と。死んだということを全部ご存知なんです。けれども、「眠っているだけだ」と。回りの人たちはイエスをあざ笑つた。キリストは、そういうあざ笑う人たちを全部追い出して、ペテロとヤコブとヨハネと、それからお父さんとお母さんと、それだけを連れて、娘さんが死んで寝かされている部屋へお入りになつて、そして、少女の手をとつて、

「タリタ、クミ！（少女よ、起きよ）」

と、一言発せられると、パツと目が開いて、そして、少女が起き上がった。両親に対して、



「さあ、食物を与えて。あと大事にね」

と言って、キリストは去られたわけです。

そういうようにして、キリストに対してすがっていく人にとっては、絶望ということはありませんから。絶望ということは、望みが絶えるということでしょう。万事窮す。絶望。絶望のあまりに次に人が選ぶのは死でしょ。もう生きている甲斐がないということ、死でしょ。キリストはこんなものを全部ぶつ壊してしまっただけです。キリストにあつては絶望ということはない。キリストにおいては希望、生命、栄光、それだけが輝いている。死から生命へ。

頭ではありませんよ、現実なんです。それを100%受けとる人には、それが成っていきませんから。お嬢さんが苦しんでおられたら、そのお嬢さんのこともキリストは引き受けてくださいます。「即座に」ということになるかどうかは、それは私は知りません。けれども、

「本当に、イエスさま、あなたはそれほどのお方なんです、奥田先生から『絶望』ということとはキリストにおいてははない」と聞きました」

と。死とか絶望という言葉はキリストの字引には出てこない。キリストの字引には、自由、生命、希望、喜び、愛、平安。こういったものが被いつくしているんですよ、キリストの世界は。皆さん、それぞれ思い当たる方が、この中にいっぱいいらっしゃると思うんです。

「そうだ、そうだ、その通りだ」

と。自由、永遠の生命、希望、そして、平安、喜び、愛。こういうもので満たしてください。それがキリストです。気がついてみたら、食事もいただいている、住まいもいただいている、家族もいただいていた。なんだか、身の回りが、人々が求めるものも全部備わっている。それは気がついてみたら、備わっている。

### ●100%にすべてぶつけていく

キリストはおっしゃったですよ。

「先ず、神の国とその義を求めなさい」（マタイ6・33）

と。つまり、キリストを求めてきなさい。そうすれば、必要なものは全て添えて与えられる。これはマタイ伝6章25節のところからです。私はこのマタイ伝が本当にありがたかったですね、若いとき、まだ23歳の頃です。キリストに在ってそういう世界があるということを知らされた。

I君という友人を通してキリストのことを教えていただいた。そのときは永遠の生命なんて全然、求めていませんでした。とにかく、今の心の中の暗闇、絶望的な自分の思い、そういうものから解き放たれたい。今日一日を精いっぱい、力いっぱい生きたいという、それだけだった。力が出ないんです。なぜ出ないか。思い煩いとか、そういう悔い、自分を見れば悔いが残る。後悔、それから将来に対する不安、思い煩い。そういうものに捕らえ



られて、一日一日が息苦しい。力が入らないんです。集中できないんです。だから、私は、「何も要らん。今日一日を思いっきり生かしてほしい。力いっぱい、今日一日を生きたら、明日のことは要らない。そういうふうに導いてくれるものはないのか」

と、そういう願いをもって呻吟していたときに、キリストを教えてくださいました。そして、「キリストに委ねたら、奥田君のかかえている問題はみな解決しますよ」と、そう言ってくれた。それで、私はキリストにすがったんです。その頃に、一番先に私に与えられた御言はこの6章25節からだったんです。

「<sup>25</sup>この故に我なんじらに告ぐ、何を食い、何を飲まんと生命のことを思い煩い、何を著んと体のことを思い煩うな。生命は糧にまさり、体は衣に勝るならずや。<sup>26</sup>空の鳥を見よ、播かず、刈らず、倉に収めず、然るに汝らの天の父は、これを養いたもう。汝らは之よりも遙に優る者ならずや。」

空の鳥をちゃんと養っていらっしやる神さまは、あなたという大事な存在を放っておかれないはずがあるうかと。

<sup>27</sup>汝らの中たれか思い煩いて身の長一尺を加え得んや。

「一尺」は30センチですけれども、思い煩ったからといって、背が伸びるわけではなからうと。<sup>28</sup>又なにゆえ衣のことを思い煩うや。野の百合は如何にして育つかを思え、<sup>29</sup>勞せず、紡がざるなり。然れど我なんじらに告ぐ、榮華を極めたるソロモンだに、その服装この花の一つにも及かざりき。<sup>30</sup>今日ありて明日、炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、

空の鳥を見なさい。ちゃんと天の父は養っておられる。野の花を見なさい。こんな素晴らしく輝いているではないか。その空の鳥だって、いつ地に落ちるかもわかりません。野の花だって、いつ枯れるかもわからない。それだって、こんなに素晴らしく咲き輝いてほこっているではないか。あなた方はましてや神さまに愛されている子どもたちだ。放っておかれるはずがあるうか。だから、目のつけどころを変えなさいということなんですな。

ああ信仰うすき者よ。<sup>31</sup>さらば何を食い、何を飲み、何を著んとて思い煩うな。<sup>32</sup>是みな異邦人の切に求むる所なり。

「異邦人」といいますのは、キリストを知らない人たち。神さまを知らない者たち、これが異邦人です。その人たちは仕方がない。自分しか頼りにならない。しかし、あなた方はちがう。あなた方は天の父の子だと。天の父の子ならば、天の父が養ってください。慮ってください。だから、

汝らの天の父は凡てこれらの物の汝らに必要なるを知り給うなり。<sup>33</sup>まず神の国と神の義とを求めよ、然らば凡てこれらの物は汝らに加えらるべし。

<sup>34</sup>この故に明日のことを思い煩うな、明日は明日みずから思い煩わん。一日



の苦労は一日にて足れり」（マタイ6・25～34）

なんと慰め深い言葉かと思いましたね。明日のことを思い煩わなくていいと。

「思い煩わなくていい。私がちゃんと心配してあげるから、面倒みてあげるから、大丈夫だよ。今日一日でいいんだよ」

と。私が正に求めていたことです。今日一日、それはどうすればよいのか。「神の国とその義」とはキリストです。要するに、神さまのこと、キリストのこと、それオンリーにぶつかっていきなさい。そしたら、あなたにとって必要なこと、あなたが自分でこれは自分の責任領域だと思つて背負うとしていたものは全部、実はキリストが背負っておられる。だからあなたは先ずキリストを求めて、ひたむきに生きなさい。そしたら、必要なものはすべて神さまはご存知で、全部備えてくださる。

私は責任感が強かったんです。本当に強かった。家族のこと、両親のこと、その他もろもろのこと、重い難き重荷を自分で勝手に背負いこんで、それは私が解決せねばならないと、そう思つてました。「神仏に頼る」といつたつて、何の保証もありません。心の中で「神仏」と言つたつて、何の保証もない。このキリストという方がありがたいのは、言葉をもつて保証してくださるからです。言葉、これがあるがたいんです。神の言葉は必ず成就する。言葉をもつて、「そうだよ」と言つてくださる。「はい」と。言葉と言葉で結ばれる。これが本当の人格関係なんです。そうでしょ。

「お前を愛しているよ」

「はい」

と。あのNHKテレビでやっている宮本武蔵とあのお通さんは、なにか、信じたり信じなかつたりで、ちよつと今あぶないですね。

「人は本当に最後まで信じられるのだろうか？」

とか言つてね。これが人間の常ですよ。本当に信じて裏切られないのは神の言葉、キリストです。キリストを受けとつた妻であり、恋人だったら大丈夫です。信じていいですよ。キリストがついておられるから。キリストぬぎの恋人は、私はどうかかわらないと思います。条件次第です、きつと。いい風が吹いているときはいいけれども、逆風が吹き出したら、どうなるかわかりません。

まあ、人間はそういうものなんです。絶対に責めてはいけません、人間というのはいくものなんですから。人間に過剰な期待をいだいてはいけません。過剰な期待を抱いても、絶対裏切られないのはキリストだけです。キリストを見て、キリストの言葉を「然り」と受けとつていますと、何かそこに太いパイプができあがつて、キリストは絶対に見放されません。キリストは絶対に善のみをなさつてくださる。そのことがごく自然になつてくるんです。そして、何が来ても、全部素直に受け入れることができる。

「これは受け入れます、これは嫌です」



なんて、自分で取捨選択をしなくなるんです。それまでは、「これはいいです、これはダメです」といつて、たえず自分が主人公で取捨選択して、

「神さま、あなたのこれは気に入りませんね」

とか言つて。それは人間社会でもそうです。すべて自分で取捨選択するんです、運命だつて何だつて。ところが、本当にキリストに自分を委ねての生活を続けてきますと、もうすべて

「ああ、ありがとうございます。結構でございます。すべて、結局はプラスになるんですもの。勝負はついているんですもの。結局は、神さま、あなたが勝ち給うんですから。キリストさま、あなたが勝つてくださるんですから」

と。だから、すべてをそのまま受け入れる。

人間だつてそうですよ。人間関係もそうです。すべてそのまま受け入れる。キリストが解決してくださる。キリストの導きのままに。

諦め<sup>あきら</sup>ではないんですよ。人間が生きていく上で、我々が習ってきたのは、

「諦めが肝心よ。人間はほどほどに願ひ、過剰な期待をいただいたらダメ。あきらめが肝心よ」

と、諦めることを教えられてきたんです。

「諦めの悪いやつだね、こいつは」

なんて言つてね。ところが、キリストにおいてはそうじゃない。何も諦めることはない。委ねていけば、すべてがひとりであまく動いていきます。だから、ことごとくにキリストを讃えていく。いや、キリストの側だつてそうですよ。

「あいつは、あれだけ私を信用してくれるのだから、これは絶対に裏切つてはまずい。特別にあいつのことはよくしてやらないと、私の名がすたる。キリストの名がすたる」

と思つてくださいますよ。それがさつきの、衣の房に触つた女性がそうなんです、必死の思いですがつた。

「よくぞ、そこまで私にすがつてくれた。120%答えてあげようじゃないか」

と。キリストはそうなんです。人は、  
「裏切られるのはつらいですから、10%だけ信じておきます。ちょっと信じておきます」

なんて。お賽銭を献げるのも、十分の一だけ献げます。ところが、あの寡婦は、なけなしのお金を全部献げてしまったんです。レプタ二つ。今日の晩の食事代かもしれません。食事代にも満たないレプタ二つ。今でいえば、百円玉一つくらいかもしれない。それを献げた。キリストはじつとそばで見えておられた。

「あの寡婦<sup>やもめ</sup>は自分のすべてを献げたんだ。生命<sup>いのち</sup>賭けだよ」



と。生命賭けで何かをお願いしたんですね、お祈りしたんです。それは絶対に聞かれていますよ。そういうふうには、人間というのは、キリストさまに対するときは特に、試したり疑ったり、そういう気持ちでなくて、本当に100%にすべてぶつけていけば、それを100%裏切らない方がキリストです。人間は、今までのいろんな関係で裏切られっぱなし、また裏切っぱなし。そうではありませんか。けれども、キリストは裏切りたまわない。キリストの言葉は全部、その通りになります。それが本当に誠まことということですね。

「誠」は「言」がそのとおり「成」ります。神の御言はその通り成ります。これを誠と称う。言葉通りの方、言葉をそのまま成就したもう方。「光あれ」とおっしゃったら、光があつた。そういうふうには神の言葉がそのまま成就して貫いていく世界です。これが神さまの世界です。

それが人間の世界ではゆがんでいる。人々はせつかく言葉という賜物をいただきながら。言葉を持っているのは人間だけでしょ。動物も少しは、かけらぐらいはあるのかも知れませんが、けれども、本当に言葉をもって考え、言葉をもって意志を伝え、言葉をもって神を讃えるという、そういう言葉を賜っているのは人間だけなんです。その人間の言葉がいかにも今は無力になつて、単なる伝達の手段になつてます。のみならず、人を欺くために言葉は悪用されている。

そういう、本当の言葉が生命であつた。聖なるものであつた。それを我々のこの世界に回復しなければいけないんです。まず、キリストとの関係で、神さまとの関係で言葉を大切にします。

### 「言は神なりき」

と、ヨハネ伝では書かれています。そういう世界に私たちを入れてくださっている。ですから、私たちは、こと神さまに対して、キリストに対して向かうときは、本当に幼子の心をもつて100%受け入れる。100%に自分をあずける。そういう思いで私たちが生きることですね。それが身についてきますと、今度は人間関係でもそれがだんだん行き渡ってくるんです。

「あの人は裏切らない人だ。あの人は誠なる人だ」  
と、自然にそういう評価ができてしまう。それは小さいことにも、大きなことにも等しく誠実だからなんです。

「これはいい加減にして、これは大事にして。あの人は大事な人だから非常に大事にして、この人はつまらん人だからいい加減にあしらって」

と、そういうことができなくなってしまうんです。どの事柄においても、どの人に対しても、いつも誠心誠意に。

「疲れはしませんか？」

と聞かれるけれども、それは

「疲れはしません。それが自分の姿なんです」



ということになってくるんですね。

ですから、私たちは本当にキリストにぶらさがり、キリストに熱中しておれば、いつしか私たちはキリストの質に変質しているんですよ。気がついてみたら、自分が小さなキリストにさせられてしまっているという。気がついてみたら、そうなっているという。これが神の御業なんです。それは、繰り返し申しますが、自分の立派さではない。キリストが為したもう御業です。

それぞれの方にはキャラクター、性格があります。非常にねばっこい方から、淡泊な方から、やっかいな方から、いろいろありますよ。そのやっかいなものを全部、キリストがひっくり返してプラスに用いたもう。パウロもやっかいな人だったんですよ、キリストに逆らつて。そのやっかいなパウロをひっくり返した。一番働いたのはパウロさんでしょ。パウロでなければできない働きをもの凄くやつてくれた。異邦人伝道というところで。ペテロやキリストの直弟子たちは、始めから子どもたちとして育てられた。パウロは異端者でしょ。それをひっくり返された。キリストから見たらパウロは異端者。パウロから見たらキリストは異端者。そういう関係だったのを、キリストは見事にひっくり返されたわけですから。ま、そんなことで、皆さん、ご自分については何もご心配になることはありませんから。もうすべて100%、自分の心配事も全部、キリストにお預けになさってください。キリストが善きようになさってください。

### ●天国への旅路

それから、もう少し御言を見ましよう。ローマ書8章18節から25節まで。

「<sup>18</sup>われ思うに、今の時の苦難は、われらの上に顕れんとする栄光にくらぶるに足らず。<sup>19</sup>それ造られたる者は切に慕いて神の子たちの現れんことを待つ。<sup>20</sup>造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給いし者によるなり。<sup>21</sup>然れどなお造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれ、神の子たちの光栄の自由に入る望みは存れり。<sup>22</sup>我らは知る、すべて造られたるものの今に至るまで共に嘆き、ともに苦しむことを。<sup>23</sup>然のみならず、御霊の初の実をもつ我らも自らの心のうちに嘆きて子とせられんこと、即ちおのが体の贖われんことを待つなり。<sup>24</sup>我らは望によりて救われたり、眼に見ゆる望は望にあらず、人その見るところを争でなお望まんや。<sup>25</sup>我等もし其の見ぬところを望まば、忍耐をもて之を待たん」（ローマ8・18～25）

ここに我々の現実の情況、自然界をも含めまして、そういう情況がいかなるものかということパウロは呻きをもつて書いてくれます。これはまことに現代にもピッタリのような情況です。フランシスコ会訳の口語で読みますと、

「現在の苦しみは、わたしたちに現わされるはずの栄光と比べると、取るに足



りないわたしは思います。被造物は神の子らが現われるのを、切なる思いで待ち焦がれているのです。被造物はむなしさに  
虚無ですね。

服従させられています。それは、自分の意志によらず、そうさせたかたのみ旨によるのであり、同時に希望も与えられています。すなわち、その被造物も、やがて腐敗への

「腐敗」というのは滅びですね。滅びへの

隷属から自由にされて、神の子どもの栄光の自由にあずかるのです。わたしたちは今もなお、被造物が皆ともうめき、ともに産みの苦しみを味わっていることを知っています。被造物だけでなく、初穂として聖霊をいただいているわたしたち自身も、神の子の身分、つまり、体のあがなわれることを待ち焦がれて、心の中でうめいています。わたしたちは救われているのですが、まだ、体のあがないを希望している状態にあるのです。

私たちは既に本質的に救われている。根源において救われている。霊において救われている。でも、この身体はまだ不自由な肉体の中にある。だから、この身体が本当に贖われて、あのキリストの栄光の身体になる、その時の到来を待っている。そういうことなんですね。

目に見える望みは望みではありません。目に見えるものをだれが望むでしょうか。

つまり、既に現実化して、そこに実現してしまっているものなら、もうそれは現実なんです。望む必要はない。望むということは、まだそこで、来ていない事柄です。必ず成就する。しかしまだ成就していない。そういう未来的なものを望んで、しかし、それを「然り」といっていて、そして、喜んでいて。そういう姿が希望という状況です。

わたしたちは目に見えないものを望んでいるので辛抱強く待っているのです」

（ローマ8・18～25）

それから、ペテロ前書へ行ってみましょう。ペテロの手紙の第1章3節から9節まで、

「<sup>3</sup>讚むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、その大なる憐憫に

随い、イエス・キリストの死人の中より甦えり給えることに由り、我らを新たに生れしめて生ける望を懐かせ、<sup>4</sup>汝らの為に天に蓄えある朽ちず、汚れず、  
萎まざる嗣業を継がしめ給えり」

これは完了形で書いてますね。さきほどのフランシスコ会の口語訳で読みますと、

「わたしたちの主イエス・キリストの神であり父であるかたは、たたえられますように。神は豊かなあわれみをもって、わたしたちを新たに生まれ変わらせ、イエス・キリストの死者よりの復活によっていきいきとした希望を持たせ、朽ちることも、汚れることも、しぼむこともない遺産を受け継ぐ者



としてみてくださいました。この遺産は、あなたがたのために、天に蓄えられています。信仰を持つあなたがたは、終わりの時に現わされる、準備された救いにあずかるために、神の力に守られています。ですから、今しばらくの間、いろいろな試練に苦しまなければならなくても、心から喜びなさい。試練をへたあなたがたの信仰は、火で精錬されても滅び去る金よりもずっと尊いものです。その試練が、イエズス・キリストが現われるとき、讚美と栄光と誉れに変わるためです。あなたがたは、イエズスを見たことはありませんが、彼を愛しています。今、見ていませんが、信じて、言いつくせない輝かしい喜びにあふれています。それは、あなたがたが、信仰のみりである魂の救いを手にしているからです」（一ペトロ1:3～9）

なかなかわかりやすいい訳をつけてくれています。

生ける望み。生き生きとした望み。だから、私たちの希望というのは必ず、来るべき天国と結びれているんですよ。それ抜き希望ではないんです。

「そのうちに百万円もうかるから。そのうちにこんないいことがあるから」という、それもささやかな希望かも知れませんが、私たちのいう本当の希望というのは必ず、キリストと結び付けられた希望なんです。

キリストが天界で待つていてくださる。キリストが今輝いてくださる。そして、その御国を来たらしめてくださる。そして、しかも、キリストはご自身の分身、聖霊を我々の心の中にいつも宿らせてくださって、天国いつも結び合わせてくださっているという、そういう未来を望み見ての、何かわくわくとするような、そういう希望を与えてくださっているんですよ。ですから、自由をくださったという土台、信仰という土台、キリストに結ばれているという、そういう土台の上に、つまり、解き放たれた我々が未来に向かって、未来を見ますと、それは輝いているんです。そして、御国が私たちを待つてくれている。御国は必ず成就する。この地はやがて滅び失せるでしょう。けれども、その時に新天地がそこに輝いて現れてくる。そういった希望を私たちはまざまざと見せられて、その中に引きつけられながら生きているという、そういう現実なんです。

不思議なんです。あたかも、海の上を歩いていくような現実です。キリストが海の上を歩いて来られた。ペテロが、キリストだとわかったときに、

「主さま、あなたでしたか。行ってよろしいか」

と言ったら、

「来い」

と言われた。それで、ペテロは舟を下りて歩きだしたという。二、三步、歩いたところで、何か気がついてみると、私は何をしているのかと気付いたとたんに溺れたというお話があります。イエスさまを見ている時は、歩いたんですよ。ふつと我に返った時に沈んだ。だ

から、キリストだけを見ている時は、海の上をペテロも歩いたんですよ。みんなは、沈んだペテロは不信仰だと言つて、そつちを見ますけれども、私は二、三步でも歩いたペテロは素晴らしいと思いますよ。本当に誰か二、三步でも歩いたやつはおるかと言うんです。キリストは引力でぐつと引つ張られたから、その引力がいつ効かなくなつたかというところ、ペテロがキリストから目を離して、波を見、風を感じ、自分のやつていることに我に返つた時に、ブクブクと沈んだんです。これは非常に象徴的ですね。キリストを見つめて、それに引きつけられて歩む時には、奇蹟がそこに起こっているんです。普段起こらないことが起こっている。神さまから見たら、奇蹟でも何でもありません。神の御力によつて歩んでいるだけのことですから。神の御力が支えているから。不思議でも何でもありませんけれども、我々人間どもから見たら、正にこれは奇蹟としか映らない。とにかく、そんなことが成就しているんですよ。私たちの歩みというのは、そういう本当不思議なことがいろいろと現れてくるような、そういう不思議な国に導かれて歩んでいるんです。

私たちはこの世の常識を決して否定はしません。私たちはこの世で社会生活を営んでいますから、この世の決まり、この世の法則は大事にします。それでいながら、同時に私たちは天国人ですから、二重国籍ですから、天国の国籍をいただいで、パスポートもいただいでいるから、いつでも身分証明書を見せられるんです。そういう天国の国籍をいただいた我々が、しばしのあいだ地上の歩みを他の地上の人たちと一緒にやっているんです。地上の他の方々の苦しみを一緒に苦しみとしながら、一緒に歩いていくんです。私たちはもうそこから解き放たれているんですよ、本質的には。昨日も申しましたように。

ですから、私たちはこの地上に置かれているのは、いよいよ天国のリアリティーをこの世の人たちにハッキリとお伝えして、早くこの天国への旅路の群を——旅行会社ではありませんけれども——そういう、一緒に天国への旅路をする人たちをたくさん集めて、共に御国に行こうではありませんかと。

### ● 確かな希望

この世は確かに苦しいでしょう。でも、苦しみの中にキリストの栄光は輝くんです。キリストほど苦しんでくださった方はいらつしやらないですよ。キリストも味わわれたあの十字架の苦しみ、これにまさる苦しみはあるでしょうか。しかも、キリストは、理由なくして、ご自分の中に何も理由もなくして——

「何がキリストをあんなに苦しめているの？」

「はい、あなた方の一人ひとりの罪なんです。あなた方の一人ひとりの背きなんです。あなた方が神さまに逆らっている故に、そのつけを全部、キリストが背負っておられるんです」

と。キリストは祈れば、まばゆく輝いてスーッと天国へ往かれるお方ですよ。その方が地



上に留まって、あげくの果ては、その人々の苦しみを全部背負いこんで、そして、十字架でぶつつぶれて、神さまに棄てられて、そして、我々の受くべき審判を全部引き取ってくださった。キリストにおいて審判は完了しました。だから今度、第二の審判が新天新地で来ますけれども、キリストの審判を既に受けとった人はもうそこで免除になる。試験免除なんです。全部、無試験なんですよ。もうキリストにおいて解決していただいたから。でも、「キリストは要りません」

と言う方は自分でテストを受けてもらわないといけない。これは大変ですよ、このテストは。ごまかしがききません、カンニングがききませんから、これはもうどうしようもない。それでも、キリストという方をいただいた者は、神さまが我々をご覧になるときは必ず、キリストの十字架を通して見てくださるから。人は、

「あいつは、まだけしからんやつです」  
と言いますが、神さまが見られるときには、

「キリストの十字架で彼はきれいになっているよ。お前たちがボロクソに言うものは全部映らない」

と。キリストの十字架で全部消されてしまっているから、神さまの目には映ってこない。キリストの十字架のないところから見ていると、それこそいろいろ問題があるかもしれない。けれども、神さまがキリストの十字架を通して見てくださるときには、きれいに病気も治っています。魂もきれいに洗われています。初子のように初々しい。そういう、それが神の子なんです。これをキリストは無条件で、無代価で我々一人ひとりにくださったというの、これが本当の神さまの愛なんです。十字架において神の愛は現れたんです。そうなんです。十字架において神の愛は現れた。そこにおいてすべての問題を解決してくださった。そこで解決されない問題は一つもない。そういう根源力なんです。本当の根源的なアルファでありオメガです。そういうものがキリストの十字架なんです。

だから、私たちは、いかなるときにも十字架のところへ行きます。十字架のところ、私に既に片づけられていることを感謝して、いただきます。悩みも苦しきも、人間的なそういうものは全部、十字架のところにお預けします。そこでキリストは出会ってください。キリストは十字架を通して私たちと出会ってください。

「デートの場所はどこですか？」

「十字架だよ」

「それは苦しいんでしょうか？」

「いや、もう片づいているから、輝いているよ。あのかつてゴルゴタに立っていた十字架は確かに血の十字架で、苦しい十字架だった。でももう、それは終わった。

今は、木の十字架は消えてなくなっているけれども、そこに目に見えない輝く黄金の十字架が立っている。そこから光が発しているよ。そこでお前と出会う。そ



ここではもうお前は清いよ。解放されているよ」  
「そこで出会って、何をくださるんですか？」

「キリストの霊をあげる。キリストの霊の生命をあげる。その霊の生命があれば、無条件に天国へ往ける」

と。磁石は引きつけますね。磁石は鉄片を引きつけます。磁石はなぜ北を向いているのかというと、北極を指しているかということ、地球の磁力で引つ張られているからなんですよ。我々はキリストという、その凄い磁場から引き寄せられている。それを引き寄せてくださる何に感応するかというと、聖霊がいらつしゃれば、聖霊は天の磁場に感応する。だから、キリストがくださる最大の賜物は聖霊という、御霊という、これはご自身の分身ですから、キリストが一人ひとりの中に宿つてくださる。どうぞ、キリストにお宿を提供してください。キリストにお宿を提供すれば、キリストは喜んでそこに入ってくださいって、

「もう、お前とは離れない。居候いそうろうさせてもらうから。いいね」

「はい、どうぞ、居候してください。いつまでも永遠に私と一緒にいてください」と。このお方が私たちに希望を与えてくださる。本当の裏切られない希望をくださる。そういう希望に溢れています。しばしば、「望みの忍耐」という言葉が出てきます。「忍耐する望み」あるいは「望みの忍耐」。望みというのは、さっきのパウロ書簡でも、

「忍耐して待つ」

とありました。ペテロさんもここで、私たちはイエス・キリストを見たことはないけれども、このキリストを本当に心から喜んでいるという。

「その試練が、イエズス・キリストが現われるとき、讚美と栄光と誉れに変わるためです。あなたがたは、イエズスを見たことはありませんが、彼を愛しています。今、見ていませんが、信じて、言いつくせない輝かしい喜びにあふれています。それは、あなたがたが、信仰のみのりである

つまり、結果である、

魂の救いを既に手にしているからです」（一ペトロ1:7-9）

このように我々の賜っている信仰の世界、これを小池先生は、信じ交わる「信交」と、あるいは神さまと交わる「神交」と書かれました。仰いでいるのではない。それは我々の中の実体だ、現実だ。「信仰」なんていう言葉は使いたくないとまでおっしゃった。キリストが我々一人ひとりの中に宿つて、そこで確かな希望を与えてくださっている。決して失望に終わらない。恥をかくことは絶対がない。その保証済みであります。そういうことで、私たちはいよいよ喜ばしく勇ましく進んで行くことができます。それでは、今日も時間がいっぱいになってしまいました。私がお祈りして、終わりたいと思います。

